



天国に行ったことを実感した、主人の最期

横田早紀江

★コロナの影響で休会していた祈り会が3か月ぶりに再開した6月18日（196回）。夫の滋さんが召されてから最初の祈り会で、早紀江さんは滋さんの最期のようすについて語りました。

皆様、こんにちは。しばらく祈り会がコロナの影響で閉ざされていましたので、皆様のことが懐かしく、早く再開されればいいなと思いながら過ごしておりました。そのような中で、病床にあった主人の滋が、6月5日午後天に召されました。本当によく頑張ったと思います。

入院してから2年が過ぎ、だんだん弱ってきておりました。あと3か月もてばいいとも聞いていたので、少しでも元気でいてもらいたいと思い、「めぐみのために頑張ろうね」といったことばかり言っていました。今になって、かわいそうだったなと思っています。

その日の朝、病院から電話があつて、「ちょっと弱っている感じがしますので、みなさん、来ておいてもらったらほうがよいと思います」と言われました。それですぐ、弟や息子たち、孫たちに連絡を取り、集まつてもらいました。その時は息が少し苦しそうでしたけど、顔色もよく、目をつぶっていて、みんなで代わる代わる声をかけたり、肩をさすったりしては、「案外元気そうね」と言い合っていたのです。長くなると大変なので仕事や用事がある人には、

一度帰ってもらうことにしました。ところが30分もしないうちにモニターの波が下がってきて、「ああ、帰ってもらわなければよかった」と思いました。看護師さんがすぐ来てください、「何でもいいですから、声をかけてあげてください」とおっしゃるのです。何のためだらうと思いましたが、こんなとき男の人は声が出ないのか、弟も息子たちもじ

い一と見つめているだけだったのです、ここは私が言わなくてはいけないと、主人の耳のそばに口を寄せて、「お父さん！」と大声で呼びかけました。「天国に行くんだよ！」これまで「頑張って」と言ってきたのですが、「天国にはダニエルさん（新潟時代の宣教師）や懐かしい人がいっぱい待っていてくださるのよ。もう心配いらないからね！」

そしたら、ちょっと片目を開けたような感じになったんです。「私の時も迎えに来てね！」そんなこと言う奥さんなどいないと思いますが、「忘れないで、必ず迎えに来てね。待っててね！」と繰り返すと、主人の目から涙が流れたんです。わかつ



2017年11月。受洗した日の滋さんと教会の國分牧師

てくれたんだと思いました。

そして、ポコッポコッと動いていたモニターの波がすっと停まって、ああ天国に行ったんだと実感しました。私はこんな時、大泣きするのかと思っていたのですが、そんな悲壮感はまったくありませんでした。眠っているように見えましたし、最後に言ったことばも聞いてくれたようだたし、神様は確かにいらっしゃることを感じた主人の最期でした。息子たちも深い感慨を受けたようです。

今、家には遺骨とともに、家族で選んだ主人の笑顔の写真を飾っています。これからも、力を合わせて、拉致被害者を取り戻すように頑張っていきます。